〈連載〉6

「信仰宣言（クレド）」のカテケーシス

(Ⅵ)「罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じる」

竹山昭

わたしたちが取り上げてきた「信仰宣言」は、その最後の部分で、わたしたちが受け、来たるべき将来に実現する恵みと希望の現実を宣言して閉じる形になっている。それは、いっそう複雑な形に発展した他の信仰宣言定式でもほぼ同様である。多少図式的になることを承知の上で言うなら、教会を通して、教会において、父と子と聖霊を信じるわたしたちが、自らの現在と未来を父と子と聖霊からどのようなものとして受け取るのかを告白しているのだと言うことができよう。すなわち、「罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます」。

一、罪のゆるしを信じます

「罪のゆるしを信じる」というような表現を耳にすると、あるいは、罪が何か自分とは別の、それ自体で存在するもののように誤解する人もあろう。たしかに罪とは理解しがたいものである。罪がしばしば〝闇〟のイメージで表されたりするのも、罪の愚かさやみにくさをさしてのことばかりではない。その不可解さ、理解しがたさをもさしているからに他ならない。罪とは、本質的に矛盾に満ちたものである。

しかし、罪は本来、罪人と別の独立した現実ではない。

だからこそ、罪を自覚する人は、忘れることや紛らわすことはいくらかはできるとしても、自らの罪を自分の力で消すことも、棄てることも、いやすこともできないのであろう。ある作家の言を借りるなら、「罪は人間と人間とのあいだにあるもので、法と人間との間にあるものじゃない」ということになる。キリスト者なら、法や掟にそむいたあれこれの行為自体ではなく、そのような行為となって表現されてくる自分自身のあり方が、神と自分、人と自分、自分自身との本来のかかわりかたに沿っていない現実のことだと言うにちがいない。

人が〝罪〟と感じとる言葉、行為、沈黙、無為の奥底を探ってみると、必ず、「自分をすべての中心に据えて、そこからすべてが測られている」己の姿に気づく。そこに罪の根があるとするなら、罪はまた己自身をも他の人々をも損なうのである。愛が本質的に他者の立場を大切にすることを含むのであれば、罪はいつも「愛に背くこと」でもあろう。

罪によって己の出口を閉ざし、他者とのかかわりを傷つけたり断つのなら、人は自らこれをいやすことはできない。キリスト者の信仰の立場に立てば、神とのかかわりを秘めない人間の領域はなに一つない。罪は究極的に神と人との間のことになるのである。

こうした罪がいやされ得るとしたら、傷つけられ断たれた相手からの愛以外にはあり得まい。こうした姿の愛を、人は「ゆるし」と呼ぶ。キリスト者は究極的に、神からの愛においてのみ、罪のいやしを受け取ることができよう。神の〝ゆるし〟という形での愛によってのみ、罪のゆるされたことを信じることができる。

わたしたちは、イエズス・キリストにおいて、ことにその死と復活を通して、父なる神の決して止むことなく、ひるがえすことのない愛を最終的なものとして与えられていることを信じている。つまり、根本的にゆるされていることを信じている。「罪のゆるしを信じます」とは、したがって、父なる神の、父としてのいつくしみを、罪と呼ぶわたしたちの現実の真中で信じます、との告白でもある。

「根本的に」だけではない。ゆるされても、またくり返し「自分をすべての中心に据える」わたしたちは、くり返し父なる神のいつくしみのもとに戻ります、との宣言でもある。わたしたちが、「ゆるしの秘跡」に近づくことは、この信仰告白の具体化であろう。

ただ、旅路の途上にあるわたしたちの罪のゆるしは、まだ完成していない。父なる神のゆるしが不十分というのではない。わたしたちが、ゆるされてもまた罪の現実に陥るからである。「罪のゆるしを信じます」との信仰告白は、したがって、「罪のゆるしの完成されるときを待ち望む」と

の告白、救いの完成の待望を表してもいるのである。

二、からだの復活を信じます

「罪のゆるしを信じる」告白以上に、この「からだの復活を信じる」との告白は、いっそうわたしたちの終末への希望を宣言している。

ところで、「からだの復活」は何を意味しているのだろうか。よく尋ねられることの一つに、この同じ質問がある。おそらく、死の現実を目のあたりにしているわたしたちは、いま具体的に知っている自分の肉体が、死による腐敗の後に再び取り戻されるさまを想像しで戸惑うのであろう。

聖書は、人間を魂と肉体とに分けるような人間観を知らない。聖書が「からだ」と言うときも、具体的な人間を全体的にさしている。諸信仰宣言が「からだの復活」と言うときも同じ意味に理解すべきであろう。したがって、「いま、具体的に、こうして生きているわたし自身が復活させられる」という意味である。

おそらく、先述のような誤解は、教会が長い歴史の中で遭遇し、その影響を受けてきたさまざまの文化や人間観にも原因があろう。肉体を軽んじ、肉体的なものを精神よりいっそう軽んじる考えや、人間をいわゆる〝霊魂〟と〝肉体〟の二要素から成り、〝霊魂〟を本性上不滅のものとしたギリシャ思想の影響などである。肉体を純粋に物理・化学的な、また生理学的な見地からのみ研究の対象としてきた科学的な人間観も影響している。

わたしたちは、先に述べた聖書にもとづく内容以上のことは、たしかには知らない。また、その具体的な復活体の様子も知らされてはいない。

ただ、人間が経験し、その意味を深く知りはじめたわたしたちのこの地上での生の現実から、いくつかのことをおぼろげながら希望することができる。

その一つは、わたしたちは〝からだをもったものとしてのみわたしである〟という現実（身体性という）においてのみ、この地上でのいのちを生きる。そうしたものとして神を信じ、あるいは信じない。身体性においてのみ人を愛し、あるいは傷つけ、愛に背く。からだはわたしたちの生の現実において、人とかかわり、神とかかわる場である。この世界で、自然に、歴史に、社会に深くかかわるのはこのからだとしてのわたしである。

したがって、「からだの復活を信じる」とは、この具体的なわたしの復活であるとともに、わたしが生きたそのかかわり――少なくともそこで築きあげられたものもともにわたしにおいて復活する、ということになると希望する。

「からだの復活」は、わたしが、他と切り離されて孤立したものとして復活することを意味しない。「交わりの中にあるわたし」として復活するのだ、という希望を表明していることになる。

したがって、この信仰は、人をおのずから、いま、ここでの生活に真剣に向かわせる。キリスト者は死を恐れないわけでもなく、死を他の人よりよく理解しているわけでもない。他の人よりも死をたやすく迎えられるのでもない。かえって、死の時までゆるされているこの地上での生を真剣に生きることが、復活への希望をいま、真剣に受けとめる唯一の形であることを知っているだけである。死が闇のままに終わる終着駅ではなく、そこを経なければならないとしても、それは神のいつくしみと人々との愛における交わりへと至りつく暗い通り道と受けとめることができるのみである。ただ、この信仰を告白することができる者は、この地上でともに生きる人々とのかかわり、ともにおりなしていく人々の歴史、否応なくそこにつながれてもいる自然とのかかわりを、この上もなく大切なものとしていつくしむとともに、責任を負って生きることができるであろう。

三、永遠のいのちを信じます

「からだの復活を信じる」という告白同様に、「永遠のいのちを信じる」という信仰告白もまた、多くの人に困惑や誤解をもたらしてきた。

ある青年が正直に語ってくれたことがある。「天国とか永遠のいのちとか、僕にとって興味はありません。天国に入るために、という信者さんの言い方を耳にすると、ある種の反発を覚えます。僕には、いまの、この生命が大切です。永遠のいのちに入るために、という生き方は逃避のように思えます。永遠って考えられませんし、この生命がいつまでも続くというのは、気味が悪い」。およそこんな内容であった。

この青年の気持ちが全くわからないわけではない。しかし「永遠のいのち」を信じると言うとき、この青年もまた、この地上でわたしたちが抜け出ることのできない「時間」の無限の延長の中で考えていることも否めない。

「時間」はあまりにも深く、そして全面的にこのわたしたちの生を規定しているために、時間の否定としてか「無限に続く時間」、あるいは「終わりのないくり返し」というふうにしか「永遠」を考えにくいのは当然かもしれない。

しかし、時間が独立して存在するものではなく、事物の変化をもとにして人間が生み出した基準であることを考えれば、深く、全面的に時間の規定を受けている世界は、と

りもなおさず、すべて変化のうちにある世界ということでもある。そこでは、変化しないものは、生命のないことを意味するか、あるいは不活発なことを意味することになる。「永遠の安息」というような表現もまた誤解を助長していると言えよう。「永遠の眠り」が同義的に用いられるとおりである。

ところで、聖書が「永遠」と言うとき、それは何よりも「神の世界」、「神の特徴」として用いられている。それは決して時間の否定としてではなく、むしろ「時間を超越した」ということである。「時間の主」といってもよかろう。したがって「永遠のいのち」とは、「神のいのち」、「本来神のものであるいのち」と異なる意味合いではなかろう。

わたしたちの信仰の観点からは、永遠とは経験される今の時の否定でもなければ、その終わった向こうにあるものでもない。神のいのちのありようのことだと言う方がよい。

わたしたちは、父のひとり子がこの時間の中に人となることによって、時を超越する神のいのちの世界（永遠）が時に完成をもたらすことを知った。世界と人間を創造することによって神は時間をも創られたのであるが、それは、時の流れを通して、人を神のいのちに招くためであったことを、わたしたちは信じたのである。この観点からは、神学者たちが、時は永遠のうちで完成されるために、一時的に生成するのだ、と説くのもうなずけよう。

たしかに、わたしたちも、この地上の経験の中に、全面的に規定されているはずの「時間」をある意味で超えている経験をひろうことができる。何かに夢中になっているとき、通常の時の流れから解放されている。心ゆるせる友や愛する人々との語らいの中で、一時間が十分ほどしか経っていない、という思いがする。おそらく、それはいのちの充実のためであろう。ある種の行為は、たとえ時間の中のある時点でなされたものであっても、時の流れを超えて人々に深い感動と現実味をおぼえさせる。少なくともその行為をする当人にとっては、時の制約を超えたある種の絶対的性質を帯びている。たとえば、コルベ師の愛の行為などはそうであろう。

わたしたち個々人にとって、死は時の終わりであり完成でもある。少なくとも、もはや時の制約を受けないという意味で――。だが、わたしたちにとっては、それは永遠である神のいのちに招かれて何の制約もない神との交わりに生きるという積極的な意味において、完成なのである。

それは、そこで初めて始まるいのちではない。ヨハネの手紙にはっきりと述べられているように、永遠のいのちであるイエズス・キリストを信じるわたしたちは、すでに永遠のいのちをもっている（Ⅰヨハネ5・13、20）。パウロが言う

ように「土の器に」おいてではあるが(Ⅱコリント4・7)、わたしたちのうちに、永遠のいのちは、もう始まっている。

「永遠のいのちを信じます」との信仰告白は、いま、この時間の規定のうちにある生において、ひとり子イエズス・キリストによって、聖霊において、自らのいのちにわたしたちを招いていてくださる父なる神の驚くべき恵みを告白し、そのいのちの完成を待ち望む、わたしたちの感謝と喜びに満ちた希望の表白でもある。

終わりに

「信仰宣言」に沿って、六回にわたり、わたしたちは、〝だれに向かって〟、〝どんなことを〟告白していることになるのか、またそれは〝わたしたちにどんな意義をもつのか〟を中心にときほぐそうとしてみた。最初の願いであった「洗礼志願者を主対象に」という点からみれば、不親切な内容になったように思えて、不備ばかりが目立つ。

一つだけ心にとめていたのは、「教義は、結局は、栄誦である。そして、その本来のふさわしい場は典礼における賛美の告白である」とのカスパーの言葉であった。「信仰宣言」が感謝と賛美の告白となれば、嬉しい。

(たけやま・あきら　鹿児島教区司祭)

『福音と教会』1985.1(第39巻1号).